



ピリピ人への手紙 1-4章 ピリピ人と山上の説教、使徒行伝、2コリント

2016.3.9

ピリピと山上の説教、使徒行伝、2コリント [与え喜びは幸い]
 29:16: 16:20: 8:9: 施す↔盗む

マ6:1-18 ⁵⁹¹⁽⁺¹³²⁵⁾ 報いを受け取る. 施す. 偽善者 ^{16カ19:4¹PTA 四倍} 施す. 盗人がそれを返す.
⁴³³⁶ 祈り(主の祈り) ¹³²⁵ パンと与え給え ¹³²⁵

マ6:19-34 宝を天に積む. 神に仕えろ. 富に仕えろ ¹³⁴⁹ ^{マ6:1}
 心配するな ³³⁰⁹ ^{マ4:6} 何も思い煩わず 感謝. 祈り ²¹⁶⁹ ⁴³³⁵

マ7:11 良きものを与えろ ¹³⁹⁰⁽⁺¹³²⁵⁾ ^{マ4:17} 贈り物 ¹³⁹⁰⁽⁺¹³²⁵⁾

使16: マケドニアの町ピリピ ^{ルテマ家}
 パウロとシラスが招かれしに. 祈りつゝ賛美と歌う.
^{マ1:12-18}

使20: 労苦して弱者を助ける. 受ける者も与え給うが幸いである. 自分たち ¹³²⁵

2コリント8:9: マケドニアの神の恵み. 恵みのわざ (恵みの感謝 5485×10!) ^{2コリントに181}
 金. 貸し. 富む. 贈り物. 与え. 善い笑. 満ちあふれる. 良いわざ. 奉仕...
^{マ4:10-20} ^{マ1:11}

エペソ4:28 盗人は盗むな. 貧乏に施すために. 正しく働け. 自分たち (使20:34)

ピリピ人への手紙と山上の説教の似ているところは「喜びなさい。喜び踊りなさい。義に飢え渴いている者は満たされ、義のために迫害されている者は、天の国、国籍をいただける。」「天の御国はその人のものだから」というところを前回やりました。

続けて他の箇所ですね。6章の最初に「幸い、幸い」という報いの段落があって、次に「殺してはならない」という律法の段落があって、6章に報いの段落があって、「裁いてはならない」というまた律法の話。教え、報い、教え、報い、という段落で山上の説教が構成されています。2番目の報いの段落ですね。報いを受ける、施す、祈るといようなことが、6章に書いてありますね。そうではなくて「天に宝を積みなさい」と。神にも仕え、富にも仕えることはできません。心配するなとマタイの6章のところで言われます。心配してはいけないというのは、長くて6章25節から34節までですから、ずいぶん長い段落で、「何を食べようか何を飲もうかと心配するな。空の鳥を見なさい。何を食べるか何を飲むかと言って心配しないで、神の国とその義を第一に求めなさい。そうすれば全てのものが与えられます。」という「御国とその義を第一に求めなさい」の段落は、心配するなということなのですが、8回も出てきます。

ピリピ4章6節にもあるように、「何も思い煩わないで、あらゆる場合に感謝をもって捧げる祈りと願いによって、あなたがたの願いを神に知っていただきなさい」心配事も心配するなのところも、「あなたがたの父は、それがみなあなた方に必要であることを知っているからです」というふうに言っていますよね。その「心配するな」ということ

に対して、「神様に感謝と祈りを捧げなさい。神様は良いものを与えてくれます」というふうに言います。与える、贈り物、与えられる、パンを与える、報い、報いというのが与えられる物ということで、神様から与えられる。それと自分たちが与える。与え合うような話がここに出ています。心配するなということ。施しをする。ザアカイのところで盗んだものを返しますと。人々に施しをしますということも、与えます、与えますということで、施しをするというのがここに出ていますよね。報いを与える。

使徒行伝16章は、投獄されても祈りと賛美によって救い出された。その出来事がパウロとシラスの出来事があります。それはピリピでの出来事でした。マケドニア第1の町、ピリピ。投獄されてもというのはピリピ1章の12節から18節のところで、投獄されていても大胆に語ります。「大胆に語って祈りと賛美で救われるということ」が書いてありますね。

それとエペソの教会に別れを告げる時の使徒行伝20章のところで、私はこういうふうにしてきましたよと話すところ。説教する最後のところに、「あなたがた自身が知っている通り、この両手は私の必要のためにも私と共にいる人たちのためにも働いてきました。このように労苦して弱い者を助けなければならないことと、また主イエスご自身が受けるよりも与えるほうが幸いだと言われたことを思い出すべきことを示してきた」と。ここにあって受けるよりも与えるというのが出てきますね。それでこのエペソの話がありますので、エペソの手紙の方にも4章のところに「盗みをしている者はもう盗んではいけません。かえって困っている人に与えるためにと施すために自分の手で正しい仕事をして働きなさい。」という最後に言っていることと同じことをまた手紙の中でも言っています。

第2コリント8章から9章のところで、献金の話が長くあるのですが、そこでコリントの教会に対して、マケドニアの教会の模範を話しています。マケドニア教会というのはピリピの話ですから、マケドニアの教会の恵みのわざ、神様の恵み、神様の恵みのわざをこの第2コリント8章から9章で話します。「恵み」というのと「感謝」というのが、5485という番号で「感謝しました、めぐみします」という同じ言葉なんだね。。それが第2コリント全体に18回も出てくるのですが、その中の半分以上の10回は、この8章から9章のところの「恵み、感謝、貧しさ」。同じようなキーワードとしては「献金、貧しさ、富んで、贈り物を与える、義の実」もありますね。満ちあふれている良いわざ、奉仕、というこの献金の中に、恵みと感謝のわざというのが、マケドニアの教会、ピリピの教会がやっていることだということがここからも分かると思います。与える者、施す者は幸いですというのが、ピリピの全体のピリピの教会の役割、盗みに対しての施し、与える。十戒の8番目の「盗んではならない」に対して与えるということ。す。

別のホワイトボードで、満たされるという話、与えられるから、満ち足りる。盗んで貧しいのではなくて、貧しいのと盗むので、与えるのと満たされるというのが並行している。満たすものの一番は「喜び」。喜びだらけのピリピ。貧しい中で喜びで満たされている。それは最初の1章9節から11節の祈りと、最後の挨拶の中の4章18節から20節の中で並行しています。最初はパウロは「あなた方が満たされる、あなた方が満たされる。それを求めています。」最後は「あなた方の愛で私は満たされています。満ち溢れています。あなたがあなた方の全てを満たしてくださるキリストが富を与えてくれるはずです。」と言って終わりますので、喜びで満たされる。与える者は幸いである、受けるということが、ピリピで言われている教えられていることだと思いますが、他の箇所と一緒に見てください。